今週の倫理

2024. 9. 14～9. 20

9月のテーマ　｜　親祖先への感謝

1403号

受け継がれてきた「生命の流れ」を自覚する

「親祖先がいる」という事実は、当たり前過ぎて見過ごしやすいかもしれません。そうならないための一つの試みとして、家系図の作成があげられます。

例えば、子供が誕生した際に、自分と相手方の両親、祖父母、曾祖父母も含めた家系図を書いてみてはいかがでしょうか。それを共有することで、親祖先からの生命の流れが現在の自分たちにどのように受け継がれてきたのかを、改めて知ることができます。これにより親祖先へのありがたさが一層深まることでしょう。

今号では、「親を知る」という実践に取り組んだ会友の事例を紹介します。

純粋倫理を学ぶAさんは、ある日の経営者モーニングセミナーで親に関する内容の講話を聞きました。そこで、〈「本を忘れず(末を乱さず)」というけれど、それ以前に、「命の根元(もと)」である親を知ることが大切なのではないか〉と思い至り、これまで断片的に聞いていた両親の幼少期や結婚までの経緯などを改めて質問しました。

Aさんの父は、実親の名前も知らずに雪国で子供時代を過ごし、中学校を卒業した後は育ての親の元を離れて、東京で就職しました。自分には帰れる実家がない、何かあっても頼れる肉親や親族がいないという思いを抱えながら、仕事に没頭しました。

結婚を意識する年齢になってから、職場の先輩の勧めで何度もお見合いをしましたが、親がわからないことを理由に、すぐに断られる状況が続いていました。そうした中で、求婚を受け入れてくれたのが、若き日のAさんの母親だったのです。

Aさんの父は〈自分は結婚できないのではないか、家族と幸せに暮らすことは自分には叶わない夢なのではないか〉と思ったこともあったそうです。「『親なし子』と言われていじめられた自分が、家族を持てた。こんなありがたいことはない」と力説する父に対してAさんは「お母さんと結婚できてよかったね」と言わずにいられなかったそうです。そして、傍らで話を聞いていた母には「お母さん、お父さんと結婚してくれてありがとう」と言いました。その時の思いをAさんは、次のように言います。

「自分から見ると、母は誰と結婚しても幸せな家庭を築けた人。それに対して父は、母と結婚できたから幸せになれたように思えました。そうした両親が出会い、結婚して私や兄妹が誕生したわけですが、その不思議さやありがたさを思うと、父に対して〈よかったね〉、母に対して〈ありがとう〉という言葉が自然と出てきました」

▼

親祖先の存在なしに私たちの命は存在しません。祖先や父母がめぐり逢い、家庭を築いてきたからこそ、その生命は受け継がれて、今の私たちが存在しています。

時には、時間をとって親の歩んできた道や祖先という存在に正面から向き合い、「自分が生きている」という事実(奇跡)の不思議さ、ありがたさに思いを馳せたいものです。

え・城谷俊也

一般社団法人倫理研究所法人局